9 教師自らによる保育の改善の方法

子どもの育ちを支える教師の責任は、日々よりよい保育を進めていくことにあります。保育の進め方については、いくつかのパターンがありますが、細部の方法についての定型はありません。なぜなら、「あなたと同じ人間は存在しない」ように、保育の対象である子どもたちも、「一人として同じ子どもはいない」からです。出会う子どもも、おかれている状況も、その時々で異なる保育では、これが正しいやり方だという絶対的な基準はありません。同じように見える子どもの行為も発している意味は異なっています。つまり保育は、定型的なパターンに沿っていく側面と、一人一人の子どもに柔軟に対応していく側面を行き来しながら、進められていく教育的行為なのです。この双方の行き来を有効にして、子どもの発達を支援していくためには、教師としての力量をつけ、常に保育の改善を心がけていくことが大切です。では、どのようなやり方で保育の改善にのぞんだらよいのでしょうか。

1　改善の考え方

保育を改善していくときの形と手法の最も基本にあることは、教師自らが自分の保育を日々振り返り、反省していくことです。つまり、改善に向けて、試行錯誤しながら、継続し、積み重ね、柔軟に考え、自分自身の改善の方法を打ち立てていくのです。ここではまず手がかりとして、次頁の表にあるように、「子ども理解」「指導計画の見直し」「教師の関わり」を縦軸にすえ、「個々の教師が行うこと」「同僚の教師とともに行うこと」を横軸において、保育の改善について具体的に述べていきます。

2　子ども理解：子どもの姿を読み取る

保育を改善していくにあたって大きな手がかりとなるのは、子どもを理解し、保育のあり方を振り返ることです。子どもが「○○をしていた」という表面的な行為だけではなく、「どのように」「だれと」「どんな気持ちで」それを行っていたのかなどを子どもの姿から読みとり、洞察し、理解し、次の活動をどのように展開していくかを考えることが必要なのです。そのためには、以下のような観点から記録をとり、整理するとよいでしょう。

◇記録をとる

子どもたちが降園した後で、教師は、その日の流れやエピソードを中心にして記録します。その方法として、その日のクラスの様子を保育日誌として記録したり、個々の子どもの様子を個人別に記録したりしますが、定型はありません。個々の教師が書きやすいように工夫して、形式を定めていくのが良いでしょう。

◇保育の改善の方法と手がかり

	個々の教師が行うこと	同僚の教師とともに行うこと
子ども理解	◇記録をとる ・子どもが、どこで、どのように遊んでいたか ・子どもは、どこで戸惑ったり、つまずいたりしていたか ・子どもの行為の背後には、どんな気持ちがあったのか ・友達と、どのような関わり方をしていたか ・どのように環境に関わっていたか ・興味や関心は何に向けられているか ◇記録を整理する	◇記録を見せ合い、意見を交換し合う。 ◇他の教師がとらえた、個々の子どもの姿を知らせ合う ◇子どもの行為をどう読み取ったかについて、意見を交換し合う ◇担任以外からみた、学級の子どもたちの姿について意見を交換し合う
指導計画の見直し	◇日案・週案・月案・期案・年間計画などについて、子どもの姿と重ね合わせながら振りかえる ◇指導計画の細部について省察する ・ねらいは妥当であったか ・内容は子どもに即していたか ・方法は子どもに合っていたか ・環境の構成は妥当であったか ・教材は内容に即していたか ・時間は十分に保障されていたか	◇共通に取り組む活動について、他の教師と共に保育の改善点を考えていく ◇日案・週案・月案・期案・年間計画などについて、それぞれの教師の振り返りを持ち寄り、話し合い、園全体の教育課程の改善につなげていく ◇それぞれの学級の指導計画の妥当性や、保育の内容や方法、環境の構成などについて具体的に話し合い、疑問を出しあったり、意見を交換しあったりする
教師の関わり	◇個々の子どもに対する関わり方を、振りかえる ・その子どもに即した言葉のかけ方をしていたか ・援助のタイミングは、よかったか ◇遊びや生活の進め方への介入は、子どもたちの主体性を尊重して行っていたか ◇自分の保育観、発達観、子ども観、価値観などを問い直す	◇教師同士で互いの保育を見合い、教師と子どもとの関わりを話し合う ◇テーマを決めて、全教師で研究に取り組む ◇教師同士の保育観、発達観、子ども観、価値観などを日常的に話し合う ◇教師同士で集まって、保育カンファレンスを開催する ◇園外から講師を招いてカンファレンスを行う

日誌として記録を記すことは、その日の保育を頭の中で再現することで、「子どもたちが何に興味や関心を示していたのか」、「友だち同士のかかわりはどう展開していたのか」、「子どもたちがどのように環境に関わっていたのか」など、全般的に見た子どもの実態が捉えられます。さらに印象的なエピソードを記したり、その日の出席記録（出席簿）を見返したりしながら、一人一人を思いうかべて記録し

ていくことで、それぞれの子どもの遊び方や活動への取り組み、行為の背景にある子どもの気持ちや戸惑いなどを読み取ることができ、より深く子どもを理解していくことができます。

◇記録を整理する

日誌や個人記録をもとに、学期や数ヶ月の単位で整理することも、子どもを理解していく上で重要です。目の前の子どもの姿をとらえてつける日々の記録は、その後の保育の改善に役立ちます。さらにその記録を整理することによって、長期的見通しの上にたった子どもの発達を総合的にとらえることができます。整理する観点として「興味・関心」「遊びへの取り組み」「生活の仕方・態度」「自然への関わり」「友達との関わり」「健康に関すること」などを、記録に際しての共通項目として位置づけて、子どもの姿や発達の変容をとらえて整理しておくといいでしょう。

◇記録の情報を他の教師たちと共有する

幼稚園によっては、日誌記録を上司に提出することが義務付けられていることもあります。これは、園全体で保育を把握していくのに役立ちます。記録されていることが、気軽な場で取り上げて話し合われたり、記録されていない子どもの印象的なエピソードが、他の教師からもたらされたりします。他の教師から情報を得ることは、子どもの姿をとらえる視点や、子どもの理解の仕方についての互いの違いを学び合うよい機会でもあります。

このような機会を通して、多様な側面をもつ子どもたちを深く理解していく力が育っていきます。

3　指導計画の見直し：日案・週案・月案・年間計画などを見直す

まず教師は、その日、その週、その月の流れを振りかえりながら、「指導計画」という視点から改善を試みることも大切です。日案を振りかえり、子どもの姿と重ね合わせながら、次の日の保育への改善につなげていきます。「その日のねらいや内容、方法は子どもに適していたか」「計画を遂行することにとらわれ過ぎて、子どもの主体性を無視していなかったか」「1 日の流れの中での時間配分や、活動に取り組むときの机や椅子の位置、教材や用具の準備や置き方など環境の設定は適当であったか」などを、指導計画という枠組みから具体的に振りかえり、改善すべき点は次回の計画にいかしていきます。週案や月案なども同様の視点から省みます。

同年齢のクラスが複数あり、共通の活動に取り組んでいる場合には、教師同士が一緒に話し合って改善していくことが必要です。

また全教員が一堂に会して、それぞれの日案・週案・月案・年間計画の見直しを話し合うことは、園全体の教育課程を改善していくことにつながります。教育課程の改善も、子どもたちの姿や園を取り巻く環境、時代の要請などに応じて考えていく必要があるのです。

4 教師の関わり：子どもへの援助の仕方、教師の働きかけ方などを省みる

子ども理解につなげていくひとつの手がかりとして、その日の出席記録を見ながら子どもの姿を再現していくことを挙げましたが、多くの子どもを一人で担当している場合、出席記録を見ても、その子どもの行動が明確に浮かんでこないことがあります。そのような場合には、翌日の保育の中で意識的にその子どもとの関わりをもつように心がけることが大事です。一人一人の子どもの動きを思い起こしながら、子どもへの関わり方についても振り返ってみましょう。瞬時に対応しなければならなかった保育場面を思い浮かべていくと、「言葉のかけ方や援助のタイミングが適当であったか」「あのような説明の仕方では、子どもには分かりにくかったかもしれない」「援助の手を差しのべるのをもう少し待っていたら、子ども自身で克服できたかもしれない」「子どもに厳しく注意したけれど、それでよかったのか」など、考えなおす場面に思い当たります。

保育には、保育理論や知識だけではなく、その人の人間性や人格が目に見えない形で働きます。従って、保育を改善していくということは、教師自身の「保育に対する考え方＝保育観」「子どもに対する考え方＝子ども観」「発達に対する考え方＝発達観」「日常生活における価値のおき方＝価値観」を問い直して、独自の保育を創りあげられていくことなのです。この問いかけが、立ち話的に、互いの考えや感想を気軽に述べ合うインフォーマルな教師同士の情報や意見交換や、全教員が集まって話し合うフォーマルなカンファレンスなどの機会になされることで、自分の保育観・子ども観・発達観・価値観の確認や更新につながり、教師としての成長を促し、保育を改善する力を育てていくのです。

以上のように、子どもの姿や内面の理解、子どもにとって意味のある指導計画や教師の関わり方の改善などが、幼児教育の効果を高め、子どもの成長を支えていき

ます。同時に、以下に述べるカンファレンスや研究、研修も、日々保育を改善していくための力をつけてくれます。

5　園全体で取り組む改善：カンファレンス、研究、研修などを通して行う

全教員で、それぞれの保育を客観的に見直す契機として行う保育カンファレンス、園全体が一丸となってテーマを決めて取り組み保育の改善につなげていく研究、教師としての研鑽を積むための研修などが、保育の改善に立ち向かう教師の力を育て、教師としての成長を支えていきます。

カンファレンスでは、誰もが対等に本音で話し合うことが大事です。一つの意見に集約したり、結論づけたりすることではなく、様々な経験や考え方をもっている教師たちが、共に話し合いながら学ぶのです。自分の保育の不足箇所や改善点に気づき、多角的な視点から考えることを実感し、自分の保育を再構築していきます。

園内研究や指定研究（文部科学省や自治体などから受ける）では、保育の実践に根ざしたテーマのもとに研究を進めていきます。研究を進める中での話し合いや保育事例の検討をしていく過程で、日々の保育の改善のヒントを得ることが多くあります。研究は、その成果をまとめて発表することも重要ですが、研究過程での教師の成長を促すことを忘れてはなりません。その過程で、外部から大学の教授等を講師に招いて理論的な示唆を受けたり、指導や助言を仰いだりすることもあります。また、研究成果を外部にも公開することで、助言を得ることができ、園としての保育の改善につながっていきます。幼児教育では、新人段階における「新任研修」、経験者を対象にした「10 年研修」、そして幼児教育現場の管理責任者としての「園長研修」など、教師のライフステージに応じた研修体制が義務付けられています。これらの他にも、保育理論や保育技術・技能の研修が、幼児教育関係の出版社や民間の教育団体で開催され、教師たちは園外に出て学び、保育の改善に向けて力をつけていきます。

目の前の子どもの動きにそって対応が変わって行く保育を、マニュアル化することはできません。ここに保育の面白さと難しさがあり、保育を改善していく意義があります。しかし、保育の改善は、常にそれに取り組もうとする教師自身の姿勢があってはじめて可能になります。自分で開発し、創り出した改善の方法を、カンファレンスや研究、研修を通して、理論や新しい知識をもとに検証し、相互に高め合うことで、よりよい保育が展開していくのです。